

「日本の劇」戯曲賞 2014 最優秀賞決定！

「日本の劇」戯曲賞 2014（主催／文化庁・日本劇団協議会）の最終選考会が 2014 年 8 月 26 日（火）、日本劇団協議会会議室にて行われ、最優秀賞が次の通り決定しました。

最終選考委員の演出家は、板垣恭一、上村聡史、内藤裕敬、中屋敷法仁、宮田慶子の 5 氏（敬称略、50 音順）です。

◎最優秀賞◎

原田ゆう

「君は即ち春を吸ひこんだのだ」

はらだ・ゆう／1978 年生まれ。玉川大学芸術学科、日本大学芸術学部大学院で演劇を専攻。卒業後、「APE」「ニブロール」「群々」などコンテンポラリーダンスの舞台に出演。2008 年より「イデビアン・クルー」に参加。並行して劇作活動も続け、『キッチュ』が第 5 回かながわ戯曲賞の最終候補に選出。『見上げる魚と目が合うか？』で第 18 回劇作家協会新人戯曲賞を受賞。

最優秀賞受賞作品は贈賞として、2016 年 2 月 25 日（木）～3 月 1 日（火）の日程で恵比寿・エコー劇場にて上演されます。演出は板垣恭一氏です。

なお、応募総数は 48 作品。一次選考を経て最終候補作品として選出されたのは、次の 7 作品でした。

◆最終候補作品◆

- | | |
|-------|---------------------|
| 林 信男 | 『癒しの庭～小川治兵衛伝～』 |
| 原 武彦 | 『女先生ほおずき日誌「うらの顔」』 |
| 胡桃沢伸 | 『いずこねぎ』 |
| 広島友好 | 『飛べないくまんばち』 |
| 岡林ももこ | 『出雲阿国—創作「天下一の歌舞伎者」』 |
| 粟島瑞丸 | 『サヤ達とドキュメンタリー』 |
| 原田ゆう | 『君は即ち春を吸ひこんだのだ』 |

最終選考委員選評

板垣恭一

『君は即ち春を吸ひこんだのだ』を推しました。強くではなく「弱く」ですが。この作品のヒロインは魅力的でした。主人公が静なのに対して動。こんなにエネルギーで、それゆえにあやういヒトがいたら周りは、良くも悪くも心動かされることでしょう。つまりハラハラすることでしょう。そのハラハラが戯曲の推進力をつくってキモチが良かったのですが、そのぶん、ヒロインがいなくなった後の失速感が激しく、それが強く推せない理由でした。作者は登場人物それぞれをとっても好きなんだろうと思わせてくれ、好感を持ちました。ただしそのあまりか、語らせすぎなのではと思ったり、逆に主人公を突き放しすぎとも感じられ、これらは作品の長所でもあり短所でもあるという印象でした。

『いずこねぎ』の、ネギと会話できる美津子さんは強烈でした。それが「不思議ちゃん」キャラでなく、方言をあやつる「おばちゃん」キャラとして描かれているのも、とても面白かったです。こういうキャラクターは「ファンタジー」を保証する存在だと僕は考えているのですが、対する他の登場人物たちのキレがあまく、物語が鋭く立ちあがっていかないところがもどかしく感じました。個人的にファンタジーと現実が交錯する物語構造にとっても興味を持っているので期待が大きすぎたのかもしれない。

『飛べないくまんばち』は、イケてない男子と、父子関係と、希望についての物語なのだと思いますが、それぞれがうまく絡まっていない印象でした。でもこのダメな主人公はかなり好きでした。いっそハチに刺されればよかったのにも思いましたが、それはまあ、好みの問題かもしれません。『癒しの庭～小川治兵衛伝～』は京都や庭などに興味があるもので楽しく読みましたが、今ひとつワクワクできませんでした。主人公である職人の矜持には共感できるのですが、政治家に直接意見するなど大切な部分がブレてしまっていると思いました。『女先生ほおずき日誌「うらの顔」』は、女先生はステキでしたが、結局、彼女がどこへ向かっているのか見えなくなりました。『出雲阿国一創作「天下一の歌舞伎役者」』は、パワフルでキュートな主人公なのに、同じ葛藤を繰り返すばかりなのが残念でした。『サヤ達とドキュメンタリー』は、こんな話あるといいよねと思います。が、こういう人たちっているのかなという疑念が残ってしまいました。

上演を目的とした選考なので、とにかくアタマよりもココロが動く作品をと心掛けて読ませていただきました。一読した時、「考える」ことより「感じる」ことが多くある作品を評価したということです。演技者および観客のココロを生々しく動かせる作品は何か。その意味で『君は即ち春を吸ひこんだのだ』に一番の可能性を感じた次第です。

上村聡史(文学座)

何をもって観客を楽しませたいか、驚かせたいか、想いを伝えたいか？ 演劇は、紙の上ではなく俳優の身体、スタッフの工夫、それらが統合した舞台空間にこそ魅力がある表現形態のように思います。そうした中で戯曲の役割というのは、その根本になるのだからとても重要な役割を占めているということは言うまでもないでしょう。ただ、様々な価値観が飽和している中で“これぞ”という面白さを見つけて物をつくるのが難しくなってきたように思います。やはり劇作にはこだわり、大げさな言い方をすれば作品の核となる哲学や思想を感じ、現場がそれに呼応する形で作品が立ち上がることが何よりだと思います。

ただ、そのこだわりも視野が狭かったり、自分では面白いと書いていても案外他人からはつまらないと思われることがしばしばで、そのためにも表現者は日々、どのような表現を選択していくことが、より多くの人に高品質のものになるかという勉強が必要に思います。

そういった意味で、受賞作となった『君は即ち春を吸ひこんだのだ』はより多くの人に伝わる手立てを持った作品のように思いました。評伝モノにありがちな資料の穴に埋まることなく、登場人物の悲喜交々と主人公の報われない想い、原田氏が描こうとした世界観がより多くの人に伝わる手立て、とくに台詞のリズムや流れが丁寧な書かれ方をしている、創作意欲をかき立てられる戯曲でした。欲を言えば起承転結の緩急が物足りない、シーン構成の説得力が弱い、いささか体裁に意外性や新しさがありませんでした。

他者に何かを伝えたいかということが非常に難しいなかで、表現形態の在り方も一層難しくなっているような気がします。もちろんスタンダードなこれまで培ってきたドラマツルグを私たちは凌駕していくのはもちろんのことですが、そこから先どういう新しい表現が見世物としての演劇が今、効果的か。そのあたりも含め、戯曲における文芸表現が向上していくことを願います。

中屋敷法仁（柿喰う客）

「日本」という国や、そこに生きる人々のことを思えるか。また、現代の「日本」の観客の前で上演すべき内容か。審査にあたってはこの二点を重視した。

受賞作となった『君は即ち春を吸ひこんだのだ』は人物や時代背景が丁寧に描かれ、劇作の確かな力量を感じた。ただ、ストーリーの構成としては単調で、やや面白みに欠ける。

構成が面白かったのは、『飛べないくまんばち』。主人公のモノローグからさまざまな場面にワープし、家族や被災地といった題材を等身大で描くアイデアはユニークだった。しかし戯曲から、これを描く「信念」のようなものが見つけられなかったのが残念だった。

『出雲阿国—創作「天下一の歌舞伎者」』と『癒しの庭～小川治兵衛伝～』は、壮大なテーマを扱う意欲は十分に伝わったが、どちらも主人公の人物像の浅さが気になった。絶対的な肯定をもって描かれているのが要因だと感じる。また、主人公が信じる「歌舞伎」や「庭」といった具体的なものに関する描写が乏しく、想像力をかき立てられなかった。

『女先生ほおずき日誌「うらの顔」』は、江戸時代の女性産科医という設定が見事だったが、全体としては時代劇、恋愛劇の色合いが強い。当時の女性の社会的地位や墮胎とい

った主題は、まだまだ描く余地があると思う。

『サヤ達とドキュメンタリー』は会話の冗長さが構成の面白さを邪魔している。最も残念だったのは、これが登場人物や場面設定を「日本以外」に脚色しても成立するのでは、と思ってしまう点。「日本の劇」戯曲賞である以上、「日本」に関するこだわりを感じた。

受賞作に推したのは、『いずこねぎ』。緊密な会話の中から、家族、地方自治体、そして日本や世界といった、さまざまな「共同体」の姿を描く手腕は素晴らしかった。審査会では設定のリアリティのなさが指摘されたが、来るべき未来を予感させる暗示的な内容と読んだ。

内藤裕敬（南河内万歳一座）

最終選考に残ったのは7作。そのうち『癒しの庭～小川治兵衛伝～』『女先生ほおずき日誌「うらの顔」』『出雲阿国—創作「天下一の歌舞伎者」』『サヤ達とドキュメンタリー』の4作は、どれも面白い着想と発想であったが、作者が自分の言葉で書いているのか？そこがアマイ。世界観にオリジナリティーが感じられないと思った。

残る3作のうち、『飛べないくまんばち』は作者が作者の言葉で書いていると感じられた。そもそも力学的に飛べないクマンバチが現に飛んでいることと、飛べない主人公の日常の対比も面白い。しかし、エピソードを独自で継げる構造が説明的である。独自の部分を会話にできたら、さらに面白くなったのではないかな。そこが残念。

選考は、『いずこねぎ』『君は即ち春を吸ひこんだのだ』の2作品に絞られ、結果、『君は即ち春を吸ひこんだのだ』の受賞が決定したが、私は最後の最後まで『いずこねぎ』を推した。まずは劇構成がしっかりしていて面白いこと。それを綴る会話と言葉、その中にあるテーマ暗喩など、「こいつ、相当に頭使ってる、書き慣れてる」、そう唸った。巧妙で油断できない作品だと思ったのだ。ただ、その巧妙さに自身が満足している気もする。その巧妙を突き抜けて飛躍する登場人物を発展させられないものか。ぶっ壊しが足りない。人とネギのアイデンティティーで終わらない物語を読みたかったと思う。

『君は即ち春を吸ひこんだのだ』は題名が変だなと思った。詩の引用だとわかって、さらに変だなと思った。作者がモチーフに惚れすぎかもしれない。セリフは美しい、文学的な感性を持った作者だ。薬物依存の発作的行動を取る女医の場面がそうだ。劇的、文学的にならねばならぬ場面が説明的になっている。残念。ラストの主人公がフンドシになるところも、そう。思わせるほどに、そのシーンは意外でなかった。勝負どころが勝負になっていない。しかし、作者の才能は十分に感じられた。心からおめでとうございます。

宮田慶子（日本劇団協議会常務理事／劇団青年座）

「日本の劇」戯曲賞2014の最終選考には、応募作品48作品の中から7作品が選出された。多様な現在の演劇界を映し出すかのような、それぞれ作風が大きく異なる7本であった。

最終的に絞り込まれていったポイントは、やはり扱った題材への基本的な「熱量と執着心」であるように思う。

戯曲を最後まで書き上げるといことは、並大抵の体力・気力では叶わない。そしてそれは、何度も読み返し手直しを入れ、足したり削ぎ落としたりという作業も伴うに違いない。いくら着眼点が良く、面白い人物をイメージしていても、終盤に近づくと途端に説明的になったり、「息切れ」とも思えるバランスの悪さや、推敲の甘さがあるものは、残念ながら「体力不足」の感が否めない。最後の一言までこだわる「腰の粘りの強さ」こそが、戯曲に求められるものであり、題材に対する作者の熱量なのだと思う。

最優秀作品になった『君は即ち春を吸ひこんだのだ』は、早世の児童文学者・新美南吉を題材にした作品であるが、登場人物一人ひとりの魅力が、単なる評伝に収まらないドラマを生んでいる。特に南吉の幼馴染みの「ちゑ」の造形は秀逸である。全編の底流に流れる「死」の気配と叙情性を保ちつつ、無理のない生活感のある台詞と人間関係が、やわらかく濃密な空気をつくっている。

『いずこねぎ』は、根を下ろす場所を問う意欲的な作品であるが、土井の持ち込む「墓の移転話」と「孝子」の描き方に説得性が欲しかった。『癒しの庭～小川治平伝～』と『女先生はおずき日誌「うらの顔」』は、大劇場を想定して書かれているが、台詞が生きていない。また場面展開も上演を想定しにくい無理がある。『出雲の阿一創作「天下一の歌舞伎者」』は史実の扱いに真偽のばらつきがあり、緻密な計算が欲しい。『サヤ達とドキュメンタリー』は仕掛けに捉われたのか、焦点がつかみにくい。個人的には『飛べないくまんばち』の設定と、テンポのあるモノローグに魅力を感じた。